

ゲーテとの対話

——煩悶するゲーテ——

何をそんなに考えているのでしょうか……。考え込むと年をとるばかりです。人間は1つのことに執着してはなりません。そんなことをすると、気持ちがいいになります。われわれはいろいろなことを雑然と考えなければなりません。

馬車に同乗したローマ法王庁の大尉は、ゲーテに向かってこう語りかけたという。当時37才。恋と仕事に苦しんでいたゲーテは、この言葉に深く感ずるところがあったとみえ、メモにして後々の教訓とした。

ゲーテにとっては苦しいイタリア旅行だった。

ゲーテが、フォン・シュタイン男爵夫人に初めて会ったのは彼が26才の時。夫人は7才年上の33才だった。夫人はヴァイマル公国の女官で、美人ではなかったが黒い髪と大きな瞳をもち、洗練された礼儀作法を身につけていた。夫人に激しい恋心を抱いたゲーテは、1700通ものラブレターを書き続けた。

2人の恋は10年間続き、夫人は43才、ゲーテは36才になった。2人の恋は、ようやく悲劇的な破局を迎えていた。

25才の時『若きウエルテルの悩み』で世界的な名声を得たゲーテは、その後ヴァイマル公国の大臣として招聘された。シュタイン夫人との恋愛が続いた10年間は、大臣としての仕事も最も忙しい時期だった。

彼は30代初めにドイツ皇帝より貴族に列せられ、内閣の首席にのぼりつめた。財政、軍事、予算編成から鉱山の経営まで、彼は国政に神経をすり減らしていた。

当時のヴァイマルは人口約6千人。面積は埼玉県の半分に満たない小さな国であったが、宮廷では進歩派と保守派が対立していた。ゲーテは進歩派に属し、大福帳的な宮廷の予算編成を改革し、軍隊を縮小し、慢性的な財政難を立て直すため辣腕を振るった。その度に古手の貴族や官僚の抵抗に合い、心身困憊の極致にあった。

恋も政治も煩わしくなったゲーテは、37才の秋、シュタイン夫人にも告げず、レモンの花咲

き、そよ風の吹き渡るイタリアへと旅立った。

この憔悴の旅行中、ゲーテは乗合馬車で大尉と同乗する。大尉は、馬車の中でも考え込んでいるゲーテを見て、冒頭の助言をする。

「1つのことに執着してはなりません。いろいろなことを雑然と考えなければなりません…。」

要するに、「人生は楽しまなければならない」という、いかにもイタリア的なアドバイスである。

—— 2人の天才：ゲーテとベートーベン ——

天才は不幸な一生を送ることが多い。モーツァルトは極貧のうちに死んだ。シューベルトも世に認められず、空しい思いを抱いて死んだ。ショープンハウエルは世を呪いながら一生を終えたし、ニーチェは狂気のうちに死んだ。

ただ、ゲーテは稀有な例外である。実際、彼は晩年になって、「わたしはいつもみんなから、『ことの外幸運に恵まれた人間だ』と、誉めそやされてきた……」と認めている。彼の交友関係も華麗としかいいようがない。シラーとの長年にわたった友情は有名だし、ナポレオンやベートーベンとも親しく会っている。アメリカの作家エマーソン、イギリスの作家ウィリアム・サッカレーはゲーテを表敬訪問した。バイロンやカーライルもゲーテと手紙を交換している。

作家としての活躍も華麗で『ファウスト』、『詩と真実』、『西東詩集』、『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』などをつぎつぎと発表し、好評を得た。公人としても作家としても眩いばかりの成功を収め、しかも82才という長寿を享有した。

しかし彼の幸運は偶然ではない。法王庁の大尉から学んだように、ゲーテは日々の現実から処世の秘訣を学んだ。だから、奢ることもなく、外見は極めて如才なかった。

面白いエピソードがある。

老年になってから、毎年、ゲーテは温泉町のテプリッツに保養に出かけた。ここでゲーテはベートーベンと巡り会った。

最初に会った日、ゲーテはベートーベンの芸術家としての資質に深く引きつけられた。翌日

2人は散歩し、次の日もその次の日も2人は会った。

たまたま2人が散歩中、オーストリアの皇后と貴族たちが向こうからやって来た。その時ベートーベンは一瞬、ゲテにこういった。

彼らが道を譲らなければなりません。わたしたちが譲ってはなりません。

だが、ゲテはベートーベンのいうことを聞かなかった。彼は帽子をとり、道の傍らに身を寄せて敬意を表し、丁寧に挨拶をした。

ベートーベンは、皇后の前で帽子にちょっと手を触れただけで、道の中央を突き進んだ。

ゲテを待っていたベートーベンはいった。

あなたは貴族連中にあまりに丁寧すぎます。

ゲテは答えた。

わたしは礼儀を守っただけです。あなたは、わたしがヴァイマル公に仕えている役人であることをお忘れですか。

当時ゲテは63才。ベートーベンは42才。自分の才能に絶対の自信を持っていたベートーベンは、王侯にも屈しなかった。年の差といえばそれまでだが、ゲテははるかに世慣れていて、自分を偉いと思っている人を、あえて否定するほどのない。ゲテは世間の習わしと人間心理を熟知した哲人でもあった。

このエピソードは、2人の天才の資質の違いを語って余すところがない。その後2人は、2度と会うことはなかったという。

——ゲテハウスにて——

わたしは、かねてからフランクフルトのゲテハウスを訪れてみたいと思っていた。『ゲテとの対話』（エッカーマン著）を読んで、ゲテの「世俗を生きる知恵」に興味をもったからである。飛行機の中継でフランクフルトには何度か降り立ったが、市内を訪れる機会はなかった。たまたまある年の夏、思いがかなってゲテハウスを訪れることができた。

フランクフルトは交通の要衝であり、金融の中心地である。かつては神聖ローマ帝国の戴冠式の街として有名であった。

マイン川北岸の旧市街の一角に、ゲテハウスがある。ゲテの父は法律家、母はフランクフルト市長の娘で裕福な家庭だった。

5階建ての建物はよく手入れが行き届いていた。ゲーテの生家は、第2次世界大戦の戦火で灰燼に帰したが、幸い調度類は安全に保存されていて、戦後に復旧された。

中庭を囲む1階はバロック調、2階はロココ調でまとめられている。ルイ16世風の4階には「詩人の部屋」がある。ゲーテはここで『若きウエルテルの悩み』を執筆したといわれる。

各部屋を巡りながら考えた。ゲーテほどの名声を得たものなら、高慢で鼻持ちならない人間になっても不思議ではない。それなのに、彼は対人関係でも如才がなかった。男爵夫人との悲恋を経験し、悩みや怒りから自由に生きる術^{すべ}を体得したのだろうか。

「処世のおきて」と題し、彼はこうメモしている。

気持ちよい生活を作ろうと思ったら、
済んだことをくよくよせぬこと、
滅多なことに腹を立てぬこと、
いつも現在を楽しむこと、
とりわけ、人を憎まぬこと、
未来を神にまかせること。

豊かな社会になっても、人のストレスは果てるところがない。些細なことで人は思い悩み、眠られない夜を過ごす。家庭で職場で社会で、愚痴をいい、陰口をたたき、噂をしあう。人は悩み続けて一生を過ごす。だが、眉間にしわを寄せて考え込んでも、年をとるばかり。風の吹くまま、とりとめもなく、心を遊ばせる。未来のことは未来に任せる。それがよい生き方である。ベートーベンのように頑張ることはない。

ゲーテは、日々の生活から学んだ処世の秘訣に従って、穏やかで豊かな人生を送りたいと願った。「生きることは迷い続けること」と知りながら、彼はそれでも「今を生きる」ことを楽しんだ。

まだ身を切る寒さの3月、外出中にかかった軽い風邪がもとで、文豪ゲーテは82才で永眠した。彼の生きざまは、わたしに多くの示唆を与え続けている。